

ヨーロッパ一人旅から帰って

周郷博



1 ひそやかな決意——一人旅

私は、ことしの春お茶の水女子大を停年退職し、戦後二十数年の教師（教授）生活の最後の四年間「四苦八苦して」やってきた附属幼稚園長併任という職からも離れた。「すくなくも一年間はどんな職にもつかない」と腹をきめて、渋沢丘陵の「山羊の家」で畑を耕し、山や川を清く保ち「乏しさ」のなかでほんとうの「勉強」を生活してみようと心にきめた。「惰性を切る」——大学教授という肩書きや時流、消費文化（知識さえ使い捨て消費物になり下がった？）に「乗って」ものを考えたり行動してはいけない、それを自ら実行しなければ、と考えた。

それと、一つは大陸中国の文革後の社会と教育の「創られてゆく」実体を肌で知って「学びたい」、という園長在任中からの切なる希望をいよいよ熱烈に持ったが、それは先方の「招待」による

ことでせいで仕方ない。が、ことしにはいつて数が増した中国要人たちの訪日の挨拶が一貫して「子々孫々まで」中国と日本がよき友人であろうとする声（課題）を私はその都度、私の（いや私たちの）大きな課題だと切実に感じさせられている。文学・出版の訪日団の団長として来られた飯文井さんなどは小人数で欲談する機会にもめぐまれたが、「いま生まれた子どもはたちまち二十歳になります……幼い子どものときに何が正しいことで何がまちがっていることかをよく教えておかななくてはなりません」といったことが淡々として語られ、私は「おやっ」というように日本の子どもたちの現在の育ちかたにいっそう深く疑問をもち「これではいかん」と思う。ことは（日本語）の崩れ、価値観、モラル、「趣味」の地すべりの低俗化のひとときに、一人でやきもきする。「子々孫々」という感覚も、「ふるさと」感覚も、日本人にはもうないみたいなのだ。園長在任の四年に、身をけずる思いで考

え悩みぬいたこの「子々孫々まで」を根にすえた、子どもの育てかたと、教育というもののありようを求めて、私は思い切って、まずヨーロッパへの一人旅にでた。かねがねシベリヤ鉄道に乗ってみたいと思っていたそのシベリヤの東のはてを、十月半ばの人気のない荒涼とした白い月夜の汽車でハバロフスクへ。そこからアエロフロートでモスクワへ。

2 “何者か”に―“誰か”に出会うだろう……

十六世紀、信長の少しまえにコサツクの隊長が「つくった」という北の町ハバロフスク。空港に置いてある無償の本の中からレニンの「社会民主主義について」という小冊子（フランス語）を手に入れて、飛行機の中でも読みつづける。エンゲルス、マルクス、レニンの「メシヤ的な情熱」（地上のことに重点をかけたメシヤ）の結晶（プロレタリア官僚主義―独裁のところで「止っている」？）を実感をもってモスクワで見ることになる。これも大いに「勉強」（課題に）になったが、ここでは触れない。シベリヤの旅の間に、日本に二十三年ミッシェンのしごとでいたという、七十三歳になる品のいいおバアちゃんマキーナさんと連れもの若い女性と親しくした。教師でフィンランドへ帰るのだと言う。「いまは世の終りです」としんみり語った言葉が胸に残る。

モスクワに三日滞在。それから、一人でロンドンへ発ったが、雪模様曇りの空はその午後きれいに晴れ上がって、空港までの一時間の田舎道はなつかしく鄙びていた。飛行機に乗って、私はもう一度「なぜこんな一人旅に出たのか？」を考えた。「観光」ではない！「（未来）を見るための旅なのだ」「内容は不十分であっても、スケールを持って（保て）」そうだ、テイヤールの主著「人間の現象」を（再び）読み通す、旅の内に「そんなふうに「さだまらない覚悟」を自分に促しながら、でも、「何か」に「誰か」に会えそうな「気がして」いた。ところが、その夕刻ロンドン（ヒースロー空港）に降りて、私ははじめて異郷の地で「野宿」でもするほかないと「心ほそさ」と焦慮を経験した。荷物を受けとったりして空港をでて夜風にあたったのは九時を回っていた。伝言のようなものに注意したが何もなし。空港に降り立つとき、これからロンドンでご主人と一緒に住むために同じ機に乗っていたという、生まれたばかりの赤ちゃんを抱いた、若い私の大学の教え子、ユキノさんとバッタリ会ったしたが、……一人取り残されたあとの心ほそさ。やっと、タクシーをたのんでBOACのターミナルにたどりつき、そこでホテルを世話してもらって一夜を過ごす。一人旅の「心ほそさ」と「出会い」の楽しみが始まったのである。

翌日の午後、「人間の未来のためのティヤール・センター」へ行って、名譽秘書のルネ・マリー・パーリーさんや、リーズ大学のウルスラ・キング教授、ミス・スウィーニーさんなどが、この「突然の訪問 surprise visit」を心から歓迎してくれて、とっておいてくれたホテルに落ちついた。私はもう孤独ではなかった。ホテルの予約を知らせてくれた航空便を私は見ずに東京を発ってしまつたのである。

3 思いもつけない「発見」

この旅の「予定された」目的は、この「ティヤール・センター」の「つぎの七年 Next Seven Years」という会合に出ることだけ。私は日本人として二人目の会員（現在三人いる）。「人間の未来のためのティヤール・センター」は六〇年代の初期に動きだし、七年前の六六年、中国の文革といっしょの時期にできた。私はジョゼフ・ニーダムを会長とするこの集りに特別な親近感をもって接触もってきた。が、それ以外はぜんぶ不定形、私の一存、偶然、漠とした友情、人間的なつながりの中にまかされていた。

二十七日のその会合（国際的な）のまえに、着いて間もなく SMC（新しい環境の中での市民の徳 Civic Virtue）という集りに連れていかれて、いろいろな人に紹介され、あとでリーズの集会に

も出ることになった。私は、こういう性質の、共通の基盤の発見というかたちでの「市民の徳」というものが動き出し、地方に自主性をもたせて「形骸化」した学校教育に新精神を吹き込むことを日本でもやらなくては、とホテルで構想したりした。バックミンスター・フラー（ノーベル平和賞候補になった建築家）の「手垢のついた神さまはもうまっぴら No More Second Hand God」の言いかたを借りれば、「手垢のついた道徳」さらに「手垢でよごれた教育」は、無用ばかりか早期に子ども（mind）を破壊するものだ——そういった「道筋」が、二十七日の集會、パリに行つて OECD のペーター・マイエル夫妻の家で夕食後夜中までの話（奥さんはフランス人でロシア語の教師——この人の車でフランスの田舎を一日、日暮過ぎまで回り、親身にフランスの六〇年代以後の混乱と絶望をきいた）、イワン・イリイチの「コンヴィヴァリテ Convivialite」の評判、ウィーンの四日間のヨハネス君、ハンナ・フィシャーさん、辻さん夫妻との親しい話合いで、ずんずん深まりひろがって、「水を得た魚」のように私の精神的な働きは、生きかえった思ひだった。教育はもはや制度の小手先のしごとではない。「大人物」の手を待っている——それがもう始まっている——紀元二〇〇〇年を目ざした「長つづきする教育 education permanente」への「混乱のなかの着実な歩み」が。